世界の日本研究 / *Japanese Studies around the World* 2023: 67–74

翻訳文体の魅惑と欲望の投影
――現代中国における村上春樹文学の受容――

王　志松*

本稿は、2009年以降の中国における、村上春樹文学の受容を考察したものである。それまで読書市場を独占してきた林少華の村上文学翻訳は論争を通してその権威を失い、「プチブル情調」式の理解も相対化された。村上文学に関し、学界・マスコミ・出版社の間では共通した話題で盛り上がった一面もあるが、相矛盾した部分もある。こうした様々な現象は、村上文学の豊かさと言える一方、学界・マスコミ・出版社各々による欲望の投影とも言えるだろう。

キーワード：中国語訳、現代日本文学、消費社会、中日関係

中国における村上春樹文学の受容は大きく三つの段階に分けられる。第一段階は1980年代末から1999年で「導入期」とされる。この段階で『ノルウェイの森』（1989）や『ダンス・ダンス・ダンス』（1991）などの作品は中国語に翻訳され、主に大学生の間で読まれていた。第二段階は2000年から2008年までの「プチブル情調期」とされる。この段階の大きな特徴として、「林少華訳」の流行が挙げられる。2000年から、上海訳文出版社は村上作品の中国語翻訳版権をまとめて購入し、「村上春樹文集」35冊の出版を開始した。このアンソロジーは林少華一人による翻訳であったため、第二段階の時期に中国で村上文学を読むことは、すなわち林訳を読むことであった。しかもすべての訳本につけた林少華執筆の序文は、村上文学理解のレールを敷くことにもなった。林少華は村上作品の登場人物から感性と内面の孤独を読み取り、その孤独を審美的世界に昇華させようとした。林の称賛したこのような人物のライフ・スタイルは、「プチブル情調」と称され、この時期、急速に都市化が進んだ中で孤立化を深めた若者たちの精神を慰めるものになった。林訳が爆発的に流行した一因はここにあったのではないかと思われる。

第三段階は2009年から現在までで、「多元期」である。2009年、村上文学の中国語訳をめぐって二つの注目すべき出来事があった。一つは、林訳について次々と批判が出てきた

* 重慶大学 教授

ため、学術誌『日本語学習と研究』（日语学习与研究）が林訳に関する論争の特集を出したこと。もう一つは、村上春樹の新作『走ることについて語るときに僕の語ること』の中国語出版について、翻訳者が施小煒に変わり、出版社も上海訳文出版社から南海出版公司に変更されたことである。この二つの出来事は中国における村上文学の受容に大きな影響をもたらすことになった。本稿では、この第三段階に当たる2009年以降の受容について、研究論文等を振り返りながら考察してみたい。

1、林訳に関する論争

2009年、『日本語学習と研究』は2回に分けて林訳に関する論争記事を6本掲載した。林訳についての批判は2004年に既に出ているが[1]、この時の論争のきっかけとなったのは2007年に出版された藤井省三（当時、東京大学教授）の著作『村上春樹のなかの中国』である。藤井は当著で、林訳の美化された翻訳文体を「厚化粧」と呼び、それが「林訳の中文ナショナリズム」の現れだと批判している[2]。これに対し、林少華は即座に「林訳村上：零点か?!」という文章を発表し、翻訳の問題をナショナリズムの問題と結びつけて拡大解釈されたことに激しく反論した[3]。林訳をめぐる論争は、村上文学の翻訳のみならず、文学翻訳の理論と実践、さらに中日文化交流でのナショナリズムをどう取り扱うかなどの問題にも関わってきた。そこで、北京師範大学日文学部は2008年3月特別ワークショップ「村上文学の中国語翻訳と受容」を開き、藤井省三教授と翻訳家林少華の対話を実現させた。ワークショップでは他の研究者の参加もあって活発な議論が行われた。これらの発言は後に論文にまとめられ、『日本語学習と研究』（2009年第1期と第5期）に掲載された。以下、発表された論文を簡単に紹介しておきたい。

藤井省三は「村上春樹の中国語訳――日本文化の土着化と中国本土文化の変革」で「私の研究の目的は、翻訳の巧拙を判定することではなく、中国・香港・台湾の現代文化史における村上文学翻訳の意味を考えること」と断ったうえで、村上文学翻訳の問題を中日近現代文学交流の大きな背景の下で考察している。村上は魯迅作品の日本語訳を読むことを通して魯迅の影響を受け、そして彼自身の作品は翻訳を通して中国現代文学に影響を与えたのである。藤井は、このような循環的な影響関係の中で林少華が村上文学の翻訳で果たした大きな役割を評価しながらも、林訳の誤りを指摘し、ローレンス・ヴェヌティの翻訳理論を援用して林少華の美化された翻訳文体を改めて問題化した。藤井によると、林訳の翻訳文体が村上文学の性格を変えた結果、中国への異質な文化の導入を阻害したと論じた[4]。

1　孫軍悦「〈誤訳〉のなかの真理――中国における『ノルウェイの森』の翻訳と受容」『日本近代文学』第71集、2004年、141–156頁。

2　藤井省三『村上春樹のなかの中国』朝日新聞社、2007年。

3　林少华《林译村上：“0”分？!》、《中华读书报》、2007年11月28日、第9版。

4　藤井省三「村上春樹の中国語訳――日本文化の土着化と中国本土文化の変革」《日语学习与研究》、2009年第1期、111–117頁。

これに対し、林少華は「文体の翻訳と翻訳の文体」で、本稿の主な目的は論戦あるいは反駁にあるのではなく、この場を借りて村上作品の翻訳方法に関する自分の見解を述べたいと言明している。林は、「文学翻訳は再創造の芸術であり、訳者の個性即ち訳者の文体はその中に含まれるはずである。言い換えれば、文学翻訳は原作者の文体と訳者の文体の融合、あるいは文体の翻訳と翻訳の文体との妥協的融合産物でしかない」と述べ、自分の翻訳は百パーセント等価翻訳ではないとしても、かなり原作の文体を忠実に伝えたのだと主張している[5]。

双方の論点が必ずしも噛み合ったわけではないが、論戦の口調がだいぶ和らいできたところで、文化交流、翻訳理念と翻訳方法などの問題が提起された。『日本語学習と研究』にはその他に、翻訳文体と政治の関係を論証した王成の「翻訳の文体と政治――〈林訳〉文体論争について」、言語学から林訳文体の特徴を具体的に検証した林璋の「文体の翻訳と批評――林少華訳『ノルウェイの森』を例として」、中国の社会転換期における林訳の社会的役割を分析した王志松の「翻訳、解釈と文化の越境――「林訳」村上文学について」、林訳と林の解釈の関係を論述した楊炳菁の「文学翻訳と翻訳文学――中国における林訳村上テキスト」が収められている[6]。これらの文章は林訳の可否のみならず、広く文学翻訳の適正や文体の選択や文化越境性などの問題にも及んでいる。

2、村上春樹は「東アジアの闘士」か

上記の王志松や楊炳菁の文章では林訳につけた序文も問題として取り上げられた。林少華は序文でどの作品もプチブル情調式に解釈している。欧米からもたらされた「プチブルジョア」という言葉は、中国の近代化の過程において常に変質し、新しい意味合いとイメージが付与されてきた多様な概念である。プチブルジョアは、1919年の五四運動では現代文明の代名詞であったが、新中国共産党政権の1950年代になると階級批判の矛先となった時期もあり、1990年代に入るとまた消費主義、ポストモダニティの代弁者と思われるようになった[7]。林少華が消費主義やポストモダニティという点を強調して作り上げた村上文学像は、第二段階の時期に若者の読者を拡大させる上で重要な役割を果たしたが、村上文学に対する理解を制限させてしまった側面も見落とせない。したがって、第三段階では如何にこうしたプチブル情調式の解釈から脱け出すかが重要な課題となった。

まず注意すべきは、2009年に林少華が発表した「闘士としての村上春樹――東アジアで無視されてきた村上文学のなかの東アジア視点」という文章である。林は、村上春樹を近

5　林少华《文体的翻译和翻译的文体》、《日语学习与研究》、2009年第1期、118–123页。

6　王成《翻译的文体与政治：“林译”文体论争之刍议》、《日语学习与研究》2009年第1期、124–128页。以下の論文は《日语学习与研究》2009年第5期に掲載：林璋《文本的翻译与评说：以林少华译《挪威的森林》为例》109–116页、王志松《翻译、解读与文化的越境：也谈“林译”村上文学》117–122页、杨炳菁《文学翻译与翻译文学：林译村上文本在中国大陆》123–128页。

7　呉江城「モダニティの想像におけるプチブルジョアの変遷――鄭堅『異様な新人――新文学におけるプチブルジョアのイメージ研究』」『教育・社会・文化：研究紀要』第18号、京都大学大学院教育学研究科教育社会学講座、2018年3月、39頁。

現代東アジア史上の暴力と悪を暴き批判する闘士として讃え、それまでのプチブル情調式の解釈を自ら打破しようとした[8]。村上文学に関する林の解釈の転換は、ジェイ・ルービンの中国語訳『傾聴村上春樹』(2006)(原題は *Haruki Murakami and the Music of Words* [2002]、日本語訳は『ハルキ・ムラカミと言葉の音楽』[2006])との出会いが関わっているであろう。林は「暴力は日本を理解するキー――ジェイ・ルービン『傾聴村上春樹』を読む」[9]という書評で、『ねじまき鳥クロニクル』(1994)から村上の創作態度が社会介入へと変化し、暴力と戦うようになったというルービンの観点を紹介している。

このような見解はルービン特有のものではなく、むしろ当時の学界では一般的な理解であった。問題は、林少華がそれまでこの作品をプチブル情調式で解釈してきたことにあった。すなわち、林少華はルービンとの出会いを通して、『ねじまき鳥クロニクル』を暴力と戦う作品として再発見し、「東アジアの闘士」と称賛するようになったのである。

ただし、村上文学解釈で絶大な影響力を持つ訳者林少華によって、東アジアの闘士という称号を与えられた村上春樹に、疑問や批判も集まってきた。劉研は「村上春樹を東アジア〈闘士〉と見なしてよいのか――『ねじまき鳥クロニクル』の戦争に関する語り構造」で、『ねじまき鳥クロニクル』は、テクストの表層構造では集団記憶の編年史として設定されている。しかし、戦争に関する語りでは、中国人の記号化的描写や、戦争罪悪に対する虚無的態度及びゲーム式の解決方法などは戦後日本国民のトラウマの癒しになるだけで、日本のナショナリズム的立場を乗り越えたものではないと批判している[10]。由同来も、オウム真理教事件以後、村上は社会的責任感をもって日本の責任回避型の社会体制の欠陥を追究しようと標榜したが、ノモンハン事件やサリン事件を描く作品で、自らの標榜した目標に到達できなかったと指摘し、村上の歴史観は日本侵略戦争を美化する皇国史観と同じものであり、良知、正義感のある作家にあるべき使命感に背くものだと厳しく糾弾している[11]。

この時期、それまでマスコミを避けてきた村上春樹は、あえて新聞などで時々社会問題や国際問題について発言するようになった。村上の頻繁な発言に伴い、中国大陸のマスコミでは、中日外交が不調に陥った中で日本政府を批判する人物として大きく報道し、村上春樹像をますます東アジアの闘士として造型していったのである。2017 年の『騎士団長殺し』には南京大虐殺に触れた内容があるので、中国のマスコミはいち早くこの点に注目した。この作品が日本で発売されると、「村上春樹は日本右翼の攻撃を恐れず、新作品は売れ

8　林少华《作为斗士的村上春树：村上文学中被东亚忽视的东亚视角》、《外国文学评论》、2009 年第 1 期、109–119 页。

9　林少华《“暴力，就是打开日本的钥匙”：关于〈奇鸟行状录〉》、《书城》、2007 年第 9 期、65–68 页。

10　刘研《村上春树可以作为东亚的“斗士”吗？：〈奇鸟行状录〉战争叙事论》、《外国文学评论》、2010 年第 1 期、5–15 页。

11　由同来《试论村上春树否定历史、开脱日本战争责任的故意和逻辑方法》(歴史を否定し、日本の戦争責任を免除した村上春樹の意図的且つロジック的方法について)、《国外文学》、2010 年第 4 期、56–63 页。

行きトップ、初版 130 万部」(2017 年 3 月 7 日)[12] や「村上の新作品は南京大虐殺に触れたため右翼に抵抗されても売れ行き好調」(2017 年 3 月 8 日)[13] といったタイトルで報道された。『騎士団長殺し』が日本で人気を呼んだのは、日本の読者にとって様々な要因があっただろうが、上記の記事タイトルが示したように、中国では右翼言論に抵抗する文脈の中でばかり解釈されていた。村上の社会批判はすべての強権に反抗することであるが、中国大陸のマスコミでは日本の右翼と政府に反抗する言行として報道されたのである。

そこで一つのパラドックス現象が生じた。中国国内では、マスコミが村上春樹を「東アジアの闘士」として称揚することに反発して、学界では「偽の闘士」と否定されてきたのである。李立豊は「経験記憶が文学記憶になった時――村上春樹の「満洲叙事」の史観について」で、『ねじまき鳥クロニクル』において確かに戦争の悲惨さが描かれているが、それは戦争に対する歴史的反省ではなく、日本人の個人的被害をもってアジアに対する日本の全体的加害を隠そうとしたものだと批判している[14]。

3、プチブル情調の商業価値

プチブル情調は、学界とマスコミにおける批判後も、出版社にとっては、村上作品出版の宣伝で愛用されているイメージである。たとえば、『走ることについて語るときに僕の語ること』の中国語版（2009）は、これまで村上作品を翻訳出版していた上海訳文出版社ではなく、南海出版公司から出版されることになったが、カバーの腰帯に書かれた宣伝用語には、「清淡如云，宁静如水」（雲の如く清淡で、水の如く寧静である）とあり、林少華の作り上げた孤独で脱俗した村上像が連想され、プチブル情調が極めて濃厚であると言わざるを得ない。

この作品に限らず、南海出版公司から出版された他の村上作品の宣伝でも、プチブル情調が漂っている。『アフターダーク』は暴力を描いた作品であるが、この訳本（2012）の編集担当者の推薦文は次の通りである。

> 村上春树关于孤独的经典之作。归根结底，主题还是在讲述每个人怀有的秘密，不能诉诸语言的秘密，不能谈论的秘密……那种怀有不能谈论的秘密的悲哀，他人无法拭去，能做的唯有悄悄坐在一旁。这才是村上春树独特的主题、旋律与哲学[15]。
>
> （本作は、村上春樹の孤独に関する名作である。主題はあくまで一人ひとりが抱え込んだ秘密、言葉にならない秘密、語り合えない秘密にある。〔略〕語り合えない秘密を抱えたその

12　蓝雅歌、李恬静《村上春树不惧日本右翼攻击 新书居榜首印 130 万册》(《环球时报》2017-03-07 08:35) https://m.haiwainet.cn/middle/232657/2017/0307/content_30775809_1.html（2023 年 7 月 28 日閲覧）。

13　蓝雅歌、李恬静《村上新书提南京大屠杀遭右翼抵制仍热销 3 天位居销售榜首》(《环球时报》2017-03-08 07:58）https://m.huanqiu.com/article/9CaKrnK1663（2023 年 7 月 28 日閲覧）。

14　李立丰《当经验记忆沦为文学记忆：论村上春树“满洲叙事”之史观》、《外国文学评论》、2015 年第 3 期、36–49 页。

15　http://www.anhukeji.com/baike/show-613466.html（2023 年 7 月 28 日閲覧）。

悲哀を、拭い去ることなど他人にできはしない。できることはただ、傍らにそっと座ることだけなのだ。村上春樹独特の主題であり、旋律であり、哲学である。）

ここで強調されたのは「孤独」という言葉である。下線部分は、三浦雅士の日本語の書評を抜粋して中国語に訳した文章であるが、原文は下記の通りである。

小説は深夜ひとり繁華街で過ごすマリの時間と、寝室で眠りつづけるその姉エリの時間を交互に描きながら進行する。中国語を話すマリは、ラブホテルで起こった売春婦傷害事件に巻き込まれるが、基本的には傍観者だ。傍観者だからこそ逆に、当事者たちの人生の傷を強く感じる。

推理小説に近い雰囲気さえあるが、主題はあくまで一人ひとりが抱え込んだ秘密、言葉にならない秘密、語り合えない秘密にある。いや、秘密そのものが主題なのではない。語り合えない秘密を抱えたその悲哀を、拭い去ることなど他人にできはしない。できることはただ、傍らにそっと並んで座ることだけなのだ。村上春樹独特の主題であり、旋律であり、哲学である。

そっと並んで座るそのやさしさを描くために、鳥の目のような視点が必要とされた。[16]

原文と比較してみればわかるように、宣伝文は三浦の書評から抜き出して新たに組み合わせたものである。注意すべきは、「いや、秘密そのものが主題なのではない」というセンテンスの省略である。この省略によって、原文の意味は正反対に解釈されてしまった。また、「できることはただ、傍らにそっと並んで座ることだけなのだ」というセンテンスの翻訳では、「並んで」という言葉が省略された。原文では、被害者に対して実際に何も助けられないが、「傍らにそっと並んで座る」ということは被害者の悲しみを共感し同じ立場に立つことを表している。しかし、「並んで」が省略されると、ただの傍観者にとどまる。したがって、三浦の書評を借りながらも結局、プチブル情調式の孤独の物語として編集者によって解釈されてしまった。即ち、出版社は売り上げを伸ばすために、三浦の書評を歪曲してまでプチブル情調を強調して宣伝したのである。

2015年、上海訳文出版社は『女のいない男たち』（原著2014年）の中国語版権を取得した。それまでの林訳色を抑制するために、この短編集には林少華を含め複数の翻訳者を起用し、これまでのような林による序文をつけないことにした。7年ぶりに村上作品版権を再取得したため、大々的に出版宣伝を企画した。編集チームは装丁の絵を利用し作品テーマの絵葉書8枚セットを作成した。またバッジやTシャツなどのグッズも開発した。出版発表会のほかに、次の三つの新しいことが企画された。(1) 発表会で配った絵葉書を商品化、(2) 歌手と連携し全国で発表会の催し、(3) ECサイトと連携し関連商品を開発、である。

編集者の回想によると、「この作品の版権を取得したとき、私と私のチームは原書の表紙

16 「［今週の本棚］三浦雅士・評『アフターダーク』＝村上春樹・著」『毎日新聞』2004年9月19日。

装丁を使わないことに決めた。国内の優秀なデザイナーを起用し中国版の装丁を作る」ことになったという[17]。絵葉書はもともと出版発表会の贈呈品として作られたが、意外に読者に歓ばれたので商品化された。このような宣伝のおかげで、出版されるとベストセラーになったのである。

『女のいない男たち』は人物たちのどうにもならない精神的な痛みを描いた作品集であるが、上述の宣伝によって軽やかな情調に転換された。作品テーマの絵葉書には作中から抜き出した文が印刷してある。たとえば、収録作品のひとつである「ドライブ・マイ・カー」から抜き出された文は次の通りである。「何も知らないでいられたらどんなによかっただろうと思うこともあった。しかしどのような場合にあっても、知は無知に勝るというのが彼の基本的な考え方であり、生きる姿勢だった。たとえどんなに苦痛がもたらされるにせよ、おれはそれを知らなくてはならない。知ることによってのみ、人が強くなることができるのだから。」[18]と。この作品の内容を見ると、主人公家福がほかの男性と寝た妻の動機を知って、その苦痛に打ち勝ち強くなるのではなく、知りたくてもまだ何も知ることができないままで終わっている。主人公にとって、妻と深く愛し合っていると思い込んできたからこそ、その打撃が大きい。作品の最後まで解けない謎は、主人公のそれまでの生き方を覆すような危機を含むのみならず、人間存在の不確かさと繋がるもっと普遍的な問題をも提示するのであろう。ゆえに、訳本の編集者は、語り手がいかにも悟ったような口調で語った「知ることによってのみ、人が強くなることができるのだ」という文を抜き出して「ドライブ・マイ・カー」のテーマとして解釈しようとしたところで、作品の複雑さを単純化してしまったのだと言わざるを得ない。即ち、林少華が序文をつけなくても、プチブル情調が出版社の宣伝では引き継がれているのだ。

＊　　＊　　＊

このように、2009年以降、中国における村上文学の受容は、国内外諸般の事情の影響から多元化するようになってきた。林訳は論争を通してその権威を失い、プチブル情調式の理解も相対化された。村上文学について、学界では様々な解釈の試みが始められたが、出版界はなおプチブル情調に固執している。これは、消費社会において村上文学をプチブル情調と位置づけさらにこのイメージをブランド化することによってほかの作家の文学と差異化を図ろうとする販売戦略であろう。また他方では、「東アジアの闘士」像をめぐり、賛否両論分かれているが、双方とも中日の歴史認識問題や現実の外交関係の影響で性急に政治的に解釈されてしまった向きがある。こうした様々な現象は、村上文学の持つ豊かさ、魅力ゆえであり、学界・マスコミ・出版社各々による欲望の投影と見なされなくもない。このような意味で、中国における村上文学の研究は、テキスト内部の解釈にとどまらず、社会・文化や中日関係から照らし合わせて考える視点が必要であろう。

17　姚东敏、黄昱宁《畅销书运作新视野：村上春树〈没有女人的男人们〉编辑手记》（ベストセラーを作り出す新視野――村上春樹『女のいない男たち』に関する編集手記）、《编辑学刊》、2015年第6期、68頁。

18　村上春樹『女のいない男たち』文芸春秋、2014年、32頁。

The Appeal of the Translation Style and the Projection of Desire: The Reception of Murakami Haruki's Literature in Contemporary China

WANG Zhisong*

This article examines the reception of Murakami Haruki's literature in China since 2009. Lin Shaohua's translations of Murakami's works monopolized the Chinese reading market until 2009, but with the emergence of controversies that year surrounding Lin's translations, the scholarly authority of his translation was damaged, with some voices disagreeing with his interpretation of Murakami's literature as having a "*petite bourgeoisie* sentiment." It became a hot topic in the academic world, the media, and amongst publishers, all of whom had different interests and points of view. These various phenomena reflect the richness of Murakami's literature, but also represent projections of the desires of academia, mass media, and publishers.

Keywords: Chinese translation, Modern Japanese literature, consumer society, Sino-Japanese relations

* Professor of Chongqing University